
親友

ぴーせる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

親友

【Zコード】

N2174M

【作者名】

ぴーせる

【あらすじ】

公園で突然話しかけてきた女の子。彼女は「お前の家に泊める」と言つ。

(前書き)

作品完成日：2006／08／07

「なあなあ」

女　いや、少女といったほうがいいだろ？

年頃の女の子が、突然俺に話しかけてきた。

視線をそちらに向ける。

見た目、十六か十七くらいだろうか。

冬にしては薄着の格好で、ベンチに座る俺を見下ろしている。

そりゃあ、誰でも驚くぞ。

こんな真昼間から公園でタバコを吸っているような、いかにも無職な男に普通に話しかける女の子なんて見たことがない。

しかも、「なあなあ」である。

到底女の子の言葉とは思えない。

突然のことに、俺は吸つてたタバコを落とした。

灰が服にかかる。

「あひあひ」

慌てて服にかかった灰を掃つた。

その様子を見ていた少女がこちらを見て、クスリと笑う。

お前が原因だろ？」

「間違いないようだな。お前、大輔だいすけだな？」

少女から発せられたとは思えないような口調で、少女はいった。

俺は訳が分からずただ頷く。

それを見た少女は、一タリと笑みを浮かべた。

「よしつ。じゃあ、お前の家に泊めろ」

「……は？」

びっくりして、すぐに反応が出来なかつた。

とめろ、トメロ……泊めろ。

そう漢字に変換するのに、約三十秒かかつた。

泊める？

何故。

どうして突然話しかけてきた少女を泊めなくてはいけないのだ。

しかも、こんな訳の分からぬ奴を。

確かに、見た目は可愛い。

田鼻立ちは綺麗に整っているし、スタイルもかなりいい
声もとっても可愛らしい。

同年代の少女達と比べたら、恐らく浮くだろう。

それほど綺麗だ。

でも、中身は別。

何だ、こいつは。

たつた一分未満の付き合いでも、これだけ訳の分からぬ奴だ。

これ以上いたら、俺の頭がどうにかなる。

こりは丁重にお断りしておべきだわ。

「無理」

俺の口から出た「丁重な断り方」はこれだった。

いや、これしか思いつかなかつた。

恥ずかしい。

「んだよ、無理つてつー！ せつかくお年頃のつまそつな女の子がお誘いしてやつてんだらうがつー！」

だから、こいつは何なんだ。

自分のことを「お年頃のつまそつな女の子」だってぬかしやがるこの性格。

確かにそうですけどね。

それに、お誘いつて何だ。

俺に、お前を食えつていつのか？

そもそも順序つてもんがあるだろ。

Aから始まつて、B、C……

今時の女の子はそんな大事なこともスルーするのか。

全く、これだから最近の若いモンは

つて俺、まだ二十一歳だよ。

「とにかく泊めさせわ」

そういうつて少女は、ベンチに座つていた俺の横にドカッと座つた。

よくよく見ると、とてもみずぼらしい格好をしている。

季節はずれの半袖シャツに、ボロボロのジーパン。

靴なんかは自分のサイズに合つていなによ。

髪もボサボサになつていた。

同情の目で見ていた俺を、少女はすゞい剣幕で睨みつけた。

「何見てんだよ？」

「別に……」

平穏を装つて、なんでもないようになつた。

でも実際は心臓バクバクで、やましいことをしてしまったような罪悪感で一杯だった。

別にやましいことなんかしてないけど、大人がこんな少女を見るつてだけで犯罪な気がする。

なんていうか、表現しづらいのだけれど。

それにしても寒くないのだろうか。

むつかぐれー田の、冬真つ盛りだれ？

それなのに半袖つて、どんな体してんだ、ここつけ。

むしかして、瘦せ我慢？

「へやひへん」

案の定寒かつたよつて、少女は可憐ひしへじゅみをした。

寒い、といながり腕をうわしてこる。

「つたぐ。うちこち来いよ」

「おー！ 泊めてくれるのか？」

「誰もそんなことつてねーよ。着るものせぬか、ひきこもれ

はあ、と少女はふくらため息をついた。

期待して揃した、とでもこころのだから。

いちを睨みつけていた。

「おー、それでもここや。とにかく早く行け。もう死んでるんだ」

そういうと、少女は勢いよくベンチから立ち上がる。

それにつられて私も立った。

向かうのは、我がボロアパートだ。

*

「相変わらず、ボロアパートだな、おい……」

少女は懸念をこぼしていた。

相変わらずって、来たことがあるのだろうか。

そのことを訊いてみたら、まあな、とだけしか答えてはくれなかつた。

ガチャッとボロいドアの鍵を開け、中に入る。

すると、後ろから少女の第一声が聞こえた。

「くつせーな」

「こいつは本当に女なのか?」

と、根本的な部分を疑つてしまふやうになる。

「こいつの口調はどうにかならないものか。」

美少女の印象が捻じ曲がりてしまふやうだ。

「お前なー、少しは掃除しないよ。何だよ!」の塊みたいな部屋
は

少女は鼻をつまんで、顔をしかめた。

そんなに臭いか、」。

自分の臭いは分からぬといつが、自分の部屋の臭いまで分からぬもんだとは知らなかつた。

改めて嗅ぐが、やつぱり分からぬ。

「じゃあ、お前が掃除すれば、俺はこれで十分だし」

「掃除したら泊めてくれるか？」

期待に胸をワクワクさせていた純粋な表情で、不謹慎なことを訊く少女がこじこじ。

どうにかなりませんかね、こいつ。

泊めて泊めてばかりで、そいら辺の事情を教えてもらひてない

つていうが、訊いてなかつたな。

「なあ、何で泊めてほしいんだよ？ 家出とか？」

「そんなんじゃねーよ」

やうじつて少女は、部屋の奥に進んで、コタツの前まで来た。

「入つてもいいか？」

「どうぞ」勝手に

質問したのに、否定しただけで答えをいつてくれないのは酷いと思つ。

ムカついて、俺はぶつきついにこつた。

少女は、コタツの中を確認してから足を中心に入れた。

「ミミが入つてないか確認したのだろう。

失礼な。

部屋を見てみる。

部屋の隅にしか「ミミは転がってないじゃないか。

初めは寒そうに腕をこすっていたが、一分するかしないかつてくらいうになると、暖かそうに頬を緩める少女。

これだけ見ると可愛いんだがな。

「なあ、そろそろ理由、教えてくれないか？」

「はえ～、何が～？」

完全に油断しきつた顔で、じょけたよつて少女はいつた。

本当に食つちまつだ、いのやうー。

「お前が、何で俺たちに泊まりたいのかって訊いてんだよ

「そんなに訊きたいのか?」

少女はコタツの上にあつたミカンを手に取り、皮をむき始める。

「たぶん、いつも信じてくれなことゆづれへー。」

「誰が?」

「お前が」

「信じるも信じないも、こつてみなくちぢ分からんだりづが

そつかもな、とつて、少女は一切れのミカンを口に運んだ。

おこしさうに類をほほせた。

「おひこ

「いいから話せよ

「へこへこ

手に持つていたミカンをコタツの上に置いて、少女は寝つ転がつた。

よくこいつは他人んちでこじまでリラックスできるよな。

つい感心してしまった自分を反省。

「辰也^{たつや}って奴、覚えてるか?」

辰也。

それは俺の高校時代の友人の名前だった。

高校時代に一番仲の良かつた奴で、よくふざけあつたり、遊んだり、ナンパしてみたり。

いろいろなことをやらかしたものだ。

忘れるわけがない。

ああ、と返事をして、俺は頷いた。

「その辰也が俺だつていつたら信じるか?」

「いつが辰也?」

何をいってるんだか。

ありえない、と首を振る。

辰也はもつと横暴で、がむちで、口が汚くて……

つてやつくりだな。

いや、でもあいつは男だ。

少なくとも、こつみみたいな体はしていなかつた。
何らかの原因で突然女になつてしまつた、ところのであれば納得
がいく。

でも、そんなこと普通あるか？

俺はないと思つ。

おどき話のトキメキファンタジーじゃあるまじし、そんなことが
起ついたら世界中大パニックになるだらつ。

「信じらんねーな」

俺は素直にいった。

「だよな……」

少女は諦めたよつてこいつ。

そんな声を聞いたら少し、罪悪感が生まれた。

別に悪いことではないはず。

なのに何故だらう、この気持ち。

横暴で、がさつで、口が汚くて、じつじょつもない辰也は、嘘だけはつかなかつた。

少なくとも、俺の前では一度も

タバコを吸つてることがバレたときも、由を切ればいいものがあればクラスの誰かが疑われそうになつたとき、自首しやがつた。

そのせいでも俺まで巻き添えになつちまつたがな。

でもあいつはいい奴だつた。

あ、でも、あいつは他人のした悪行までは面倒見なかつたな。

あいつ、嘘つかねーからすぐにチクつてた。

はあ、と少女はため息をついて、近くにあつたテレビのリモコンを手に取つた。

「あ、それ、つかねーよ

「何で?」

「テレビとこたつと一緒につけると、ブレーカーが落ちる

「びんぼーだな」

「……」いつは、本当に素直に感想をいうな……。

もつちょこいつの心境とか考えろよ。

悪態をついて、少女は体を起こした。

何をするかと思えば、またミカンの咀嚼。

しかし、今度は頬をほころばせることはなかつた。

何だか物寂しそうに、やや俯き加減で食べていた。

チクリと胸に棘が刺さつた気がした。

二人の間に沈黙が流れた。

俺は黙つて座つている。

「……」いつは黙つてミカンを食べている。

一切れを一回に分けて、小さく食べていた。

細く、綺麗な指に、ミカンの色がついている。

指尖の肌が、黄色に染まりつづつあつた。

「お前、辰也なんだよな？」

「……そうだ」

確認の意味を込めていった。

少女は小さく頷きながらいった。

また沈黙が流れる。

ああ、やりづらい。

Jの沈黙、どうにかならないものか。

そうだ。

まだ根本的なことを訊いていなかつた。

「あのさ、原因分かるか？」

「何の？」

「お前が女になつた原因」

ああ、といつて、少女はため息をついた。

「原因なんて分かんねーんだ。朝、起きたら突然女になつてた。それだけしか分かんねー」

少女は、お手上げのポーズをした。

信じてくれないよな、と呟いて、少女はまたミカンを食べ始める。

また、チクリと棘が刺さった。

「家族は、どうしてんだ？」

「さあな。あいつらは俺を受け入れてくれなかつたよ。拳句の果てには変人扱いまでしてさ。もうあいつらと一緒にには行きたくねー」

「そうか……」

そんなことがあつたのか。

こいつが本物にせよ、偽者にせよ、傷ついたんだな。

そして、俺も傷つけちました。

「じりんねー。」

「のー言でどれだけ傷ついたか、俺には分からん。

でも、傷ついてるはずだ。

俺のせいだ。

「んな、哀れな田で俺を見るなよ。なんなら、お前が俺を泊めてくれるか?」

「……分かった」

「そりゃ、いいのか って本当にいいのかつー!?」

辰也は田を見開いて、信じられないような田で俺を見た。

「いいに決まつてんじやんか。俺たち親友だぜ。当たり前だろ?」

これが俺の出来る、唯一の償いだと思った。

こいつを親友として認めてやる。

本当かどうかなんて知らない。

でも、少なくともこいつはそういうている。

それでいいじゃねーか。

嘘をつく理由なんてねーんだ。

それに、本当に辰也だったら嘘はつかない。

だから信じれる。

でも、食費とかキツイかもな。

あはは。

「う、うう……大輔えー」

田を潤ませて、辰也は俺に抱きつこうとした。

「えっと、ここ、本当で辰也か？」

肘で口シンと辰也の頭を叩いて、その動きを止めた。

「んな甘ったるこ声でいつな。氣色悪い」

「何だよ、それ」

ははは、と辰也は明るく笑った。

笑顔が似合つたと思つた。

*

それから一ヶ月が経つた。

辰也は俺の家で、羨ましいくらいのグータラ生活を送っている。

全く、あいつは遠慮つてものを知らない。

せつかく俺が奮発してミカンを買つてしまつたら、

「もつと田にしておきよべー

とぬかしやがる。

もう一度と買つてしまつたら、

ただ、時々あいつは可愛らしい行動を見せてくれた。

一緒に銭湯にいったとき、何でだか知らんが女湯に入るのをためらつてたから、一緒に男湯に入るか？

つて「冗談で訊いたら、思いつきり顔を赤くして拒否してきた。

その後、渋々女湯に入ったんだけど、あん時の顔は可愛かった。

顔を真っ赤にして、首をブンブン振つてやんの。

訳分かんないけど、とにかく可愛かつたのを覚えてる。

何年か振りに雪が積もったから、小さな雪だるまを作つてプレゼントしたら、外に遊びに行こうといい出した。

初めはバカバカしいな、と思つていたけど、あいつの楽しそうな顔を見てたら、じつちまで楽しくなってきた。

一緒にでつかい雪だるまを作つたりした。

こんなの高校以来だ。

あいつが調子ぶつこいて、キャピキャピ走り回つてたら、顔面から思いっきり転びやがった。

大丈夫かつて訊いたら、泣きそつな顔で、

「ばかあ」

だつて。

ムカついたけど、可愛かつた。

他にもいろいろあつた。

一緒に買い物に行つたり、散歩したり。

何か、充実してた気がする。

だけど今日は少し、違つていた。

「ん~、よく寝た~」

俺は背伸びをして、大きくあくびをした。

今日は日曜日だ。

仕事は休み、のんびりしていられる。

あいつが来てからというもの、バイトだけじゃとても生活できる
ような余裕がなくて、頑張つて就職した。

意外と簡単に入社できたことに拍子抜けしたが、入つてからのほう
が辛かった。

毎日毎日仕事仕事。

毎日毎日残業残業。

堪つたものじやない。

休みのありがたみがよく分かつた。

「おっはよ、ダイっ！」

さて、もう一眠りしようかと考えていた俺の視界に、少女 辰也が入ってきた。

辰也はここ最近、妙に親しげに話してきて、いつの間にか俺のあだ名が「ダイ」になっていた。

そういえば最近、女らしくもなってきた。

俺があげた小遣いで、自分の服を買ってきて「似合つ?」とか訊いてきたり。

仕事から疲れて帰つてきたら、エプロン姿で料理を作ってくれていたり。

変化が目に見えるようだつた。

近くにいる人が見る見るうちに変わつていいく、といつのは不思議な感覚だ。

何だか、友達を失つてしまつのような気がした。

でも、新しい友達が出来るような気もした。

「おせよ。辰也、朝からテンション高いな」

「だつてさ、今日はダイ、休みでしょ。一田中一緒にござれると
思つて、うれしくなつてさ」「さへいな

最近、こんな調子である。

まあ、うれしいはうれしいんだけど、中身が辰也だと想つと、少
し萎える。

「ねね、何する、何する?..」

まるで子供のよつて田をキラキラさせたり、辰也が尋ねてきた。

あはは、可愛いや。

でも、生憎と俺は全然体力が残つてない。

今日はやつくつと休みたかった。

「わつ、今日はやつくつをしてくれ。まだ疲れが取れてねーんだ

「えへ、ダイのケチ〜」

ぶつぶつと頬を膨らませて、怒つてることを可愛らしくアピール
する辰也。

本当に変わったな、こいつ。

庇護本能を駆り立てられた気がした。

こんな可愛い子を守ってあげたい、と。

でも中身が辰也だと想つと、その気持ちが薄れる気がした。
わしわしと少し強めに頭を撫でて、『めんな、つていつたら、辰
也は少し頬をほころばせた。』

「じゃあ、ダイと一緒に寝る」

そういって、辰也は俺の布団に潜り込んできた。

しかも、俺の枕まで奪つて。

俺は枕を奪い返して、また寝つ転がつた。

辰也は俺の腕にくつこいて、頬ずりをしてくる。

本人としては、暖まつてるのはもちろんのだろう。

でも、俺としては……ああ、理性の勝負所だ。

無事に俺の理性は働き、何とか辰也から背を向けることに成功。

グッジョブ俺の理性。

すると、今度辰也は俺の背中に、指を当けてきた。

「今から文字書くから、当ててね」

楽しそうな口調でそつこつて、辰やは指を動かし始めた。

俺の気持ちだから……。

最後にそつ眩いた気がした。

まず、横線。

次に上から下にいって、横線の辺りを越したらクルリと一回転して、下にすっと伸ばして消える。

『す』かな。

次の文字に入った。

若干斜めの横線が一本書かれる。

その一本の線を貫くようにまた、右下がりの斜線が入った。

そして、少し下のほうで斜線と平行な線が書かれて文字が途切れ
る。

『や』だな。

見当がついて 僕は首を振った。

いや、そんな訳ない。

あいつがそんなこといつなんて。

一文字は、ない。

ありえない。

ともすれば……やつだ、すき焼き。

やうだ、やうに違いない。

食べたいのかな。

せういえば、最近食べてなかつた。

今月は無理だけじ、来月ぐらこには食べさせてやれるかな。

「『すき焼き』？ そんなに金ねーんだから

「違つもんつ…。」

辰也は怒ったようだった。

何を怒ってるんだわい。

もしかして　いや、なー。

それとも図星？

はつは～ん。

そういうことか。

全く、素直じゃないな、」
。ひつ。

食べたいなら、素直にいえばいいの。」
。

「しゃーねーな。今度買つてきてやるよ。それでいいだろ？

「違つてこつてんだろ、バカつ！」

辰也は怒鳴つて、布団から飛び起きた。

俺は驚いて、辰也の方を見る。

少し、涙ぐんでるよつて見えた。

何度も口をパクパクさせて何かをいいたが、少しして口を開じる辰也。

そして、最後にこうに残して外に飛び出してしまった。

この時、俺は気がついた。

鈍感。

『 も 』と書いた後、指を止めていたこと。

背中から指を離していたこと。

そして、辰也の気持ちに。

「あはは……俺って、バカだな……」

あいつの気持ちを気付いてやれなかつた。

気付いてやろうともしなかつた。

それビビリが、「辰也だから」とこつて拒絶をえしていた。

すき。

あいつはそう、いいたかつたんだ。

罪悪感が、俺の胸に残る。

追いかける。

俺の中の、何かが俺に命じた。

気がついたときには、俺は家を飛び出していた。

あいつは、ベンチに座っていた。

*

最初に、あいつが俺に話しかけてきた場所。

何故だろ？

ほんの一ヶ月前の出来事なのに、もう何年も経つ気がする。

プランコの近くで、子供達が遊んでいた。

俺は、辰也の隣に腰掛ける。

それに気付いた辰也は、俺から逃げようと半腰になった。

「いいから、座れよ

」ついで、俺は辰也の腕を掴んで座らせた。

俺は辰也を見る。

でも、辰也は俺を見てくれなかつた。

ただ、俯いていた。

「何だよ……

辰也は、まぶくじてこいつ。

丸くて小さくなつた背中に急かされる。俺は紡ぐ。

「お前、嘘はつかねーよな？」

俺の質問に、辰也は黙つて頷いた。

愛しい。

俺を見てくれた奴がいた。

嘘もつけない、不器用な奴だけど……それでも俺を好きになってくれた。

俺も素直になれるだろうか。

たぶん、なれないだろう。

出る言葉は全部、嘘で塗り固められた、偽りの言葉。

本当の気持ちを覆いかぶせて、鋭く尖る。

俺にはそんな言葉しか出せない。

こんな俺でいいのか。

俺はこいつを好きになる資格はあるのか。

大丈夫だ。大丈夫。

何もいわず、抱きしめた。

「なつ……」

力強く抱きしめた。

言葉ではいい表せないことを表現した。

精一杯の気持ち。

大事にしたい。

そんな気持ち。

これが俺の気持ちだ。

届いて欲しかった。

傷つけてしまった、あいつの胸に。

あいつの心に。

「ば、バカつ……何すんだよ。ガキがこっち見てんだううが……」

辰也は俺を押し返そうと、俺の肩を押してきた。

でも、その手には力が入っていなかつた。

「すまん……」

俺は一言、そういうて抱きしめる力を、少し強くした。

素直にいえる言葉なんて、これしかなかつた。

バカな俺には、これしか思いつかなかつた。

「ばかっ……」

「ま、泡きじめ返してくれた。

まつ離さなー。

一緒にみひ。

俺は、こいつが好きだから。

*

「あの辺にあらんとおねえさん、ラブリーフだよー

「ほんとだまー、ラブリーフー

「いい、見ちやけませんー。」

「わー、ママがおひたー。こわー

「ひーひーひー

「……とつあえず、家に帰るつか……

「ひーひー。そだね……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2174m/>

親友

2011年8月10日19時02分発行